

二商森田君の『わが家の新聞』

1940-42



令和 6 年 11 月 1 日～7 年 2 月 27 日

解 説

1940年3月、当時京都市立第二商業学校1年生の森田茂彦君(以下敬称略)は、手書きの『わが家の新聞』を発刊した。「社長森田茂彦」による発刊の言では「此れは我が家の明朗を増し、且つ又私達が少しでも勉強のたしになればよい」という考えのもとに発行するもので、愛読を希望すると結んでいる。続いて、やはり森田が「戦地の叔父さんへ」として、「慰問文を書く変りに、一家の寄せ書きとしまして」送るので、批評や寄稿を望むとする。続けて、父と母それぞれによる「祝辞」があり、茂彦の一生懸命勉強する「決意」があり、母による家族それぞれの好きな食べ物紹介、ひな祭りなどの「三月の行事」、家族の予定を中心とする「ニュース」等がある。

『わが家の新聞』は、B4大で1号1枚又は2枚、月刊で27号まで(10号が重複しているので実質28号分)発行されたものが残っており、少なくとも約2年半続いたことになる。

森田による『わが家の新聞』にはお手本があった。千葉県市川市の私立小学校日の出学園主事野村芳兵衛による雑誌『少年倶楽部』への寄稿であり、その切抜きも、森田の『わが家の新聞』や青少年時代の日記とともに残されている。

野村の「皆さんも記者になってわが家の新聞を作りませう」(『少年倶楽部』昭和14年4月号)によれば、わが家の新聞とは、「あなたの家の楽しみを集め」「お家の楽しみを一層増やし」「誰に送っても喜ばれる」新聞としている。具体的には、家のニュースや記者になって調べたこと、実験や観察の報告や諸作品を掲げ、家族など寄稿による談話室などを設けることを説く。内容面だけではなく、カーボン複写を使って複数部作成する方法等も解説していた。その上で裏面には、小学6年生の石野正男が作ったという設定でのサンプルを掲げている。『少年倶楽部・少年クラブ総目次』中巻(ゆまに書房、2008)で確認すると、以後も野村は継続的に、『わが家の新聞』の作成を勧め、または紹介する記事を寄稿している。

野村は、1896年生まれで高等小学校卒業後、家で百姓をするも請われて代用教員となり、さらには岐阜師範学校へ進学している。地元で教員生活を送った後上京し、自由主義教育の模範校として創立された池袋児童の村小学校の訓導を勤め、同校廃校後、日の出学園に転じている(『私の歩んだ教育の道』野村芳兵衛著作集 8、黎明書房、1973)。子供が作る「わが家の新聞」という媒体は、戦後の綴方・作文教育の文脈の中でもしばしば言及があり試みられているが、国立国会図書館デジタルコレクションで確認する限り、野村より以前には言及がなく、

野村が大日本雄弁会講談社の『少年倶楽部』で広めたものと言っている。

森田による『わが家の新聞』は、初期こそ体裁・内容ともに、野村の提唱に完全に沿ったものであったが、号を重ねるにつれ、自分が関心を持った対象について長文を記す等、独自性が出てきている。

記事の内容は、本図録1頁に示したが、特に記載ないものは森田茂彦による文章である。また、弟や妹、友人による文章も、自身で転記したうえで新聞に載せている。なお、初期の号によく見られる「～月」は、歳時記的な巻頭エッセイである。

森田による『わが家の新聞』は、1942年6月8日付の27号を最後に以降のものは見つからない。日記を見ると、この年の新学期頃から、放課後に「練習」という記載が頻繁に見えるようになる。どうも、籠球(バスケットボール)の部活動を始めたようで、こうした活動が忙しくなり、『わが家の新聞』が続けられなくなったことが推定される。

25号には、出征兵士からのハガキによる戦線だよりが掲載されている。中国北部で中等学校卒業以上の高学歴者を予備役将校に養成する、栄1649部隊の篠崎明が森田による『わが家の新聞』を手にし、同じ部隊の数人に回覧したようで、「わが家の新聞は戦友におおもてに読まれてゐます」としており、小林三芳・飯田実の投書も掲載されている。

つねづね読者による投書が少ないことを嘆いていた森田にとって、こうした来信は相当に嬉しかったであろうが、新しい学校生活の魅力が勝ったようだ。

野村芳兵衛『私の歩んだ教育の道』では、かつて関わっていた『生活学校』の読者から逮捕者が出た、と特高が訪ねてきたこともあったという。野村が提唱した『わが家の新聞』は、生活綴方運動の潮流に位置づけられるものである。しかし同時に、そうして作られた『わが家の新聞』は、出征兵士への慰問状としても非常に有効なものであったことは、森田の『わが家の新聞』25号でも確認できる。

さらには、大メディアがフォーマットを提供し、これに沿った創作活動を幅広い層が展開する、ひいてはそれが、戦時体制を下支えするという点では、大塚英志が『大政翼賛会のメディアミックス：「翼賛一家」と参加するファシズム』平凡社、2018で、漫画「翼賛一家」を取り上げて指摘したものと類似の構造をも見出すことができる。

号数	年	月	記事 特に記載ないものは森田茂彦執筆によるもの
	1940年(昭和15)		
1		3	発行の言/戦場の叔父さんへ/祝辞(父森田喜之・母)/決意/行事/ニュース/談話室
2		4	四月/行事/天候の異変/去年の三月[入試思い出]
3		5	五月/誕生(母)/[ニュース]/日記を見て思い出す傑作/談話室
4		6	時の記念日にちなんで/伊勢旅行(妹貴恵)/ニュース/行事
5		7	七月/行事/天皇陛下関西行幸奉迎記/ニュース/談話室
6		8	純子の一周忌/行事/祇園祭鉾巡行記/ニュース
7		9	新学期(母)/京都引越五年にあたりての所感/関東大震災(母)/ニュース/談話室
8		10	十月/行事/ニュース/各月の異称/談話室
9		11	五年ぶりに観る神戸[遠足で、わくわくして眠れない、車窓光景と所感、故郷を見るなつかしさ]/行事/三上様一同/ニュース
10		12	十二月/遠足(喜恵)/お祖父さんの滞在日記/ニュース
	1941年(昭和16)		
10(重)		1	年頭の辞/行事/談話室/ニュース
11		2	雪日記/行事/ニュース/談話室
12		3	三月/行事/発刊一周年を迎えて(母)/雪日記/談話室
13		4	方言対比(母)/行事/わが家の出来事
14		5	[わが家の新聞新体制、ニュースを昨月の出来事へ、学苑便り覧新設、投稿乞う]/行事/学苑だより/出来事
15		6	皇后陛下行啓奉迎記/行事/談話室[友人大上の寄稿]
16		7	奮闘・感謝[大上による詩]/学苑だより/行事/出来事/人事往来/談話室
17		8	南方事情と国際関係に対する日本の地位並日本の使命[石原広一郎講演の内容]/学苑だより/行事/人事往来
18		9	呉滞在日記[広島、宮島など見学所感]/学苑ダヨリ/人事往来/行事
19		10	[石原広一郎講演続き]/行事/人事往来
20		11	呉滞在日記続き/行事/出来事
21		12	呉滞在日記続き/人事往来/学苑だより/行事/談話室
	1942年(昭和17)		
22		1	新年に際して/行事/雪日記/談話室
23		2	撃沈爆撃墜落十二月八日の感激記/学苑だより12月/行事
24		3	撃沈爆撃墜落十二月八日の感激記二/雪日記/行事/学苑ダヨリ/人事往来
25		4	大東亜戦誌[開戦時に作った詩とその解説]/行事/人事往来/戦線だより北支(わが家の新聞送付への礼等栄1694部隊篠崎明・小林三芳・飯田明よりの来信)
26		5	学苑だより/[行事]
27		6	[行事]/[出来事]

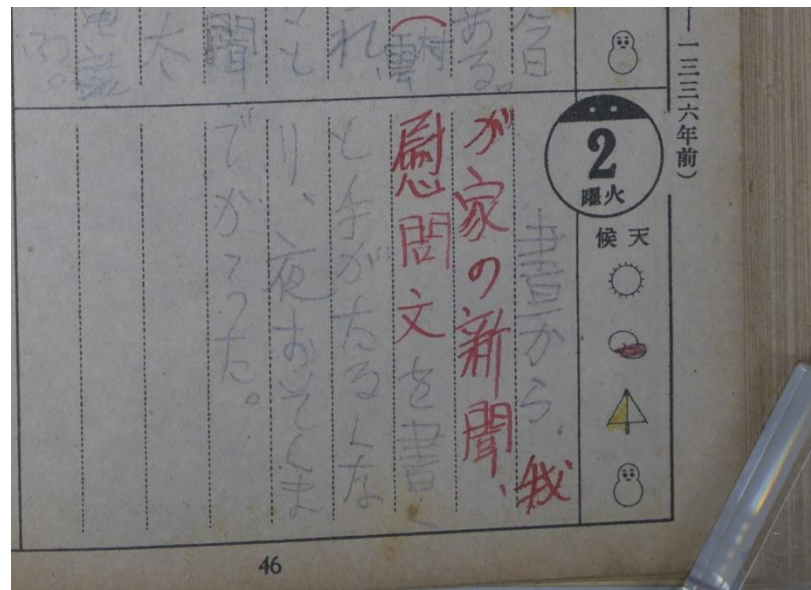
The collage displays 12 pages from the 'Waga Ie no Shinbun' (わが家の新聞) newspaper, dated Showa 10 (1936). The pages are arranged in a grid-like fashion, showing various issues and dates:

- Top Row (Left to Right):**
 - Page 1: Title 'わが家の新聞' (Waga Ie no Shinbun), Date: 四月 (April), Issue: 第三号 (No. 3).
 - Page 2: Title 'わが家の新聞', Date: 五月 (May), Issue: 第四号 (No. 4).
 - Page 3: Title 'わが家の新聞', Date: 七月 (July), Issue: 第五号 (No. 5).
- Middle Row (Left to Right):**
 - Page 4: Title 'わが家の新聞', Date: 八月 (August), Issue: 第六号 (No. 6).
 - Page 5: Title 'わが家の新聞', Date: 九月 (September), Issue: 第七号 (No. 7).
 - Page 6: Title 'わが家の新聞', Date: 十月 (October), Issue: 第八号 (No. 8).
- Bottom Row (Left to Right):**
 - Page 7: Title 'わが家の新聞', Date: 十一月 (November), Issue: 第九号 (No. 9).
 - Page 8: Title 'わが家の新聞', Date: 十二月 (December), Issue: 第十号 (No. 10).
 - Page 9: Title 'わが家の新聞', Date: 昭和十一年 (Showa 10, 1936), Issue: 第十一号 (No. 11).

The pages feature various illustrations, including flowers, a person, and a train, and contain text in Japanese, including the title 'わが家の新聞' and the date '昭和十一年' (Showa 10, 1936).



「皆さんも記者になってわが家の新聞を作りませう」では、「ところどころにスケッチやさしゑを入れてゆくと一そうおもしろいですよ」としていたが、挿絵はカーボン複写がきかず、一部ずつ手書きする必要がある、一部白抜きになっているものもある。

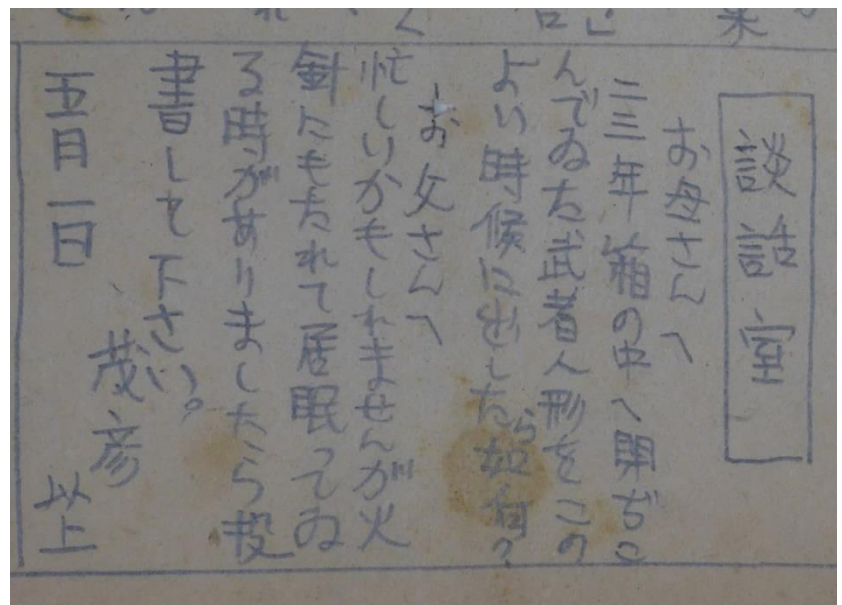


茂彦の日記にある『わが家の新聞』についての言及。1940年4月2日のもので、新聞創刊間もない頃。日記は、より広く1938年(昭和13)から、1940年(昭和20、関西学院専門学校2年)のものまでが残っている。

ただ、日記は、学業に関する記載が多いので、「わが家の新聞」と重なる内容は必ずしも多くなく、新聞への言及もまれにみられる程度である。

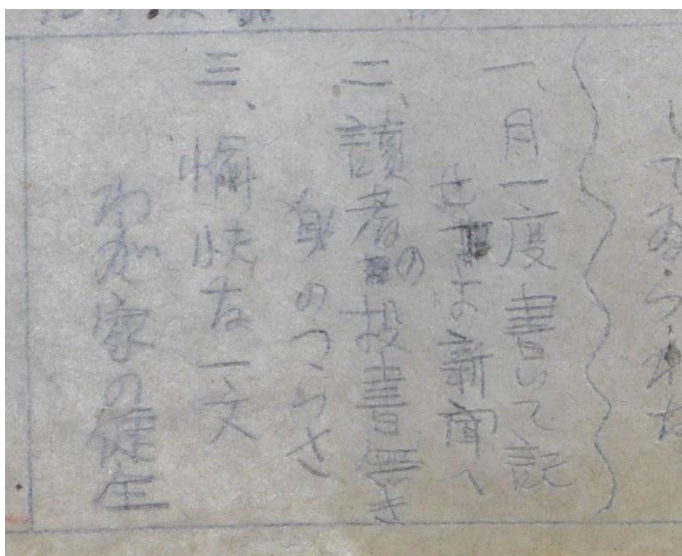
出征兵士への慰問文と並行して新聞を作っているのも興味深い。野村による「作りませう」にも『わが家の新聞』を手にして、談笑する兵士があしらわれている。

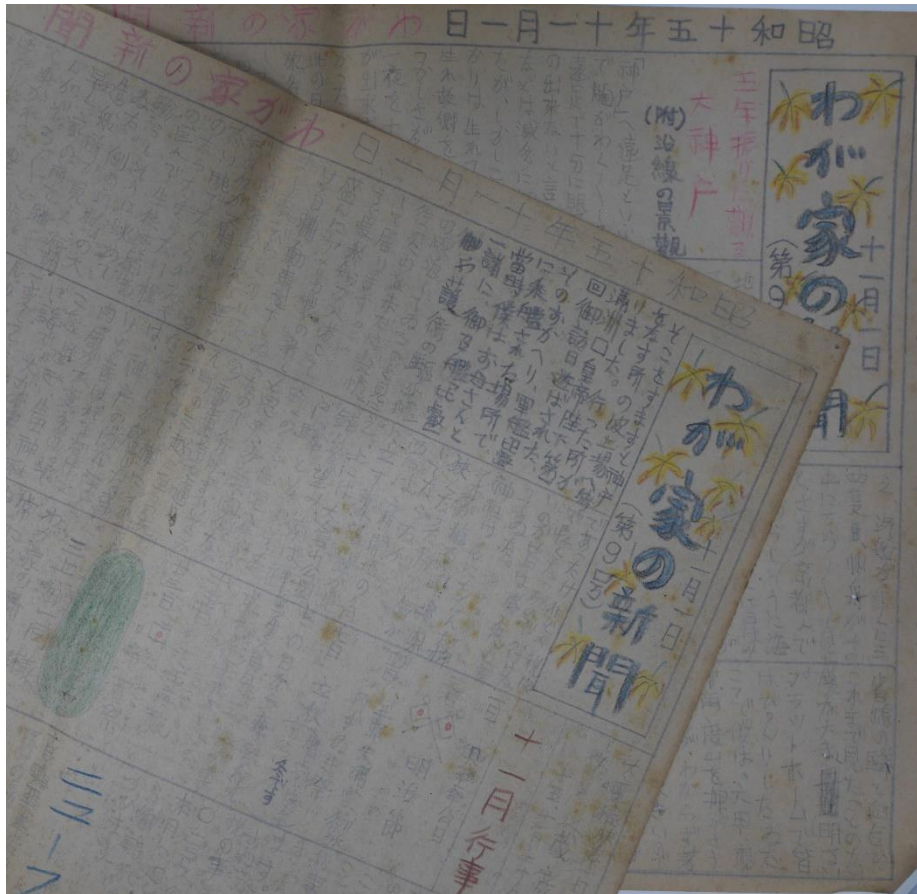
『わが家の新聞』3号より。「火針」は「火鉢」の誤りか。第1号の祝辞で「本日は創刊を祝すると最大の希望の一つを記すに止め、変りの都度投書する」格調高く宣言していた父に投書を促している。しかし、2頁の記事一覧にもわかる通り、妹や母による寄稿はあったが、結局創刊号の祝辞以外、父による寄稿は見出せなかった。



『わが家の新聞』第20号より。

二、の部分で「読者の投書無き身のつらさ」と愚痴っているのもほほえましい。

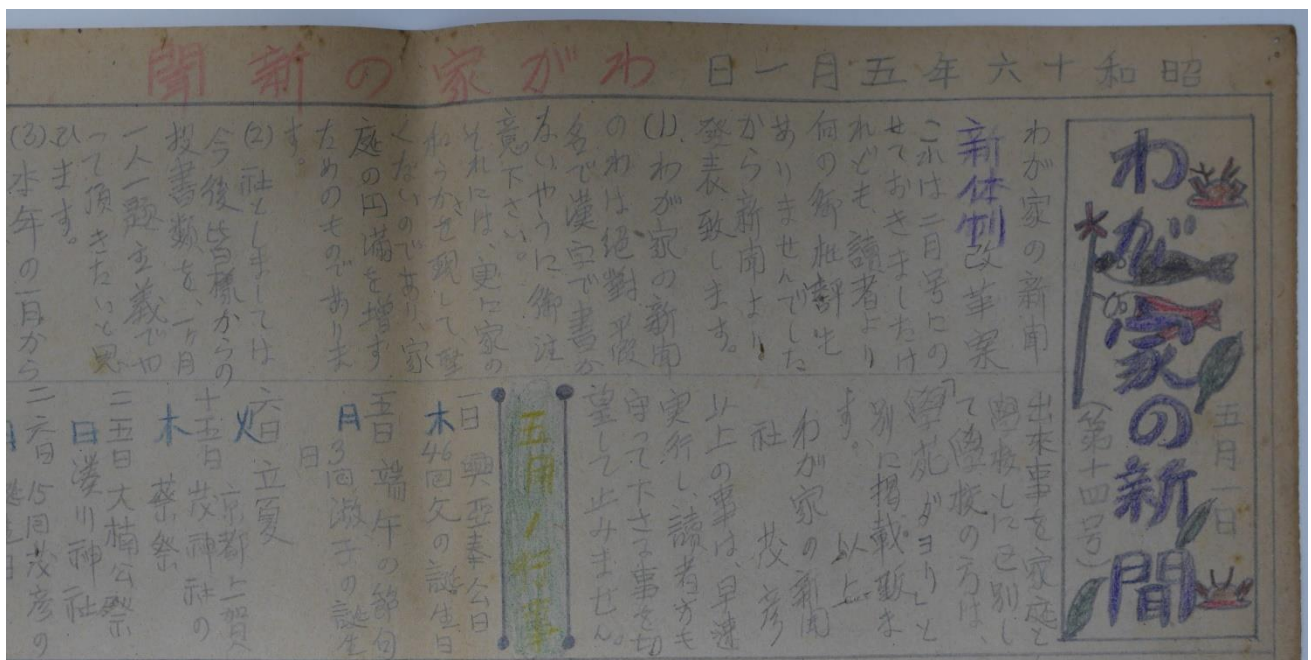




遠出をした際には、かなり長文の観察記事を書いている。第9号では、10月9日の日帰り遠足での神戸行きを各地の情景を丹念に書き込み、2面からなる紙面の3/4を当てている。

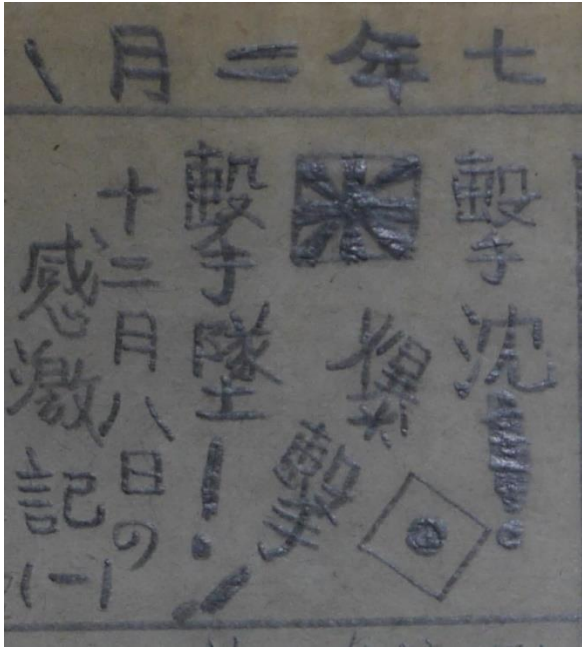
一方、日記では、「今日は神戸へ旅行で税関、波止場、湊川神社、元町、幾多に行った。さうしてなつかしくなって再び住みたい気がした」とあるのみである。

また、天皇や皇后の奉迎に参加した際にも長い文章を書いている。



「わが家の新聞新体制」内容としては、コーナーの名前等を若干変えたに過ぎないが、さっそうと登場した近衛文麿首相の談話等により流行語にもなっていた「新体制」の語を使いたかったのであろう

17歳の少年の目で見た対英米開戦の衝撃



紀元二千六百二(ママ)年、昭和十六年のこの日は、我々大日本帝国に栄えある生を享けたものは、あの感激を一生通じて心に銘記せられ忘れる事が出来ないであります。

それに就いて私の感想と見聞した事をお知らせしませう。

八日この日は棚橋信行儀の葬儀でラジオをつける事を遠慮しておましたので、午前七時の歴史的臨時ニュースの聞けなかったのは何より残念でありましたが、後程の録音放送によってあの感激を十分に味はふ事ができました。

つまり、朝七時の時報に引続いて、「タンタカターン」とオルゴールが鳴りました。我々はそれを何んと聞いたであります。今頃何んだらうといふ不思議に聞いたかもしれせん。

しかし、それは大東亜を呼起す世紀の鐘ではなかったでせうか。その瞬間何んといふ意義深い言葉、即ち、
「大本営陸海軍部発表(十二月八日午前六時)帝国陸海軍部隊は本日未明西太平洋に於いて英米両軍と戦闘状態に入れり」

とアナウンサーの声は感激に満ち満ちてみました。そしてもうすでに皇軍の戦果を祝福するかの如く勇壮軍歌のリズムが流れ出ました。しかし、我々は何んで驚きませう。唯々来たるべき秋が来たただけであります。

今日まで東亜を悪辣にも侵略しようとし、又今日の支那事变に関しても糸を引いてゐるのは実に背後の英米が援助してゐるすらであります。それを帝国は隠忍に隠忍を重ねましたが、遂に決然起って世界の大敵を一挙に引受けたのも実に我に必勝の信念に常に堅持され又偉大な力があるからであります。

そして、英国、米国はいかばかりかびっくりした事でありませう。

即ちあのヤンキーたちやそして独逸に攻撃されて国民から非難を受けてゐるチャーチルにとっては実に泣面に蜂で今にもベソをかきそうな顔が想像されるではありませんか。

(以上『わが家の新聞』23号)



此の日学校へ投稿しても誰一人として驚いたものはありません。たゞ今年中には勃発しないであらうと思ってゐたのに起った事だけ少しはびっくりしました。そして皆は口々に「やったな。やったな」と快心の程を示しました。先生は一言も

言はれませんでした。

一、二時間もなに事もなくすぎ、三時半ばにけたたましく非常ベルが鳴って先生も不思議に思はれ兎角学用品を持って校庭に集合した。

それは畏くも米英に対する宣戦の詔書が渙発されてマイクを通して奉読されるのであります。やがて往年の名アナウンサー中村氏が謹んで

「天祐を保有シ万世一系ノ皇統…」

と朗々と奉読され、吾々一同は一字一句ものがさじと直立不動の姿勢で耳を傾け直[尚の誤か]引続いて東條首相は

「大詔を拝し奉りて」

と題され、今日までの行察並に国民一般と蹶起を要望されました。後程以上のことはこれまでの興亜奉公日によって制定されましたところの大詔奉戴日にラヂオによって録音され、一億同胞はあの日の感激を新らたにして居る次第であります。

これより以前、以後は臨時ニュースに次ぐ臨時ニュースでありました。

即ち十時頃に始りその事を挙るのは枚挙に暇もなくその主なものをお知らせ致しませう

先づ最初古賀支那方面艦隊司令官が上海に於いて米英艦隊に降伏を進めましたが、さすが粘り強い英国はこれに応ぜず、黄浦河上に〇〇よりする巨砲にまたゝまに沈没しました。が、米国はさっさと手を挙げてわが軍によって拿捕されて今は「多々良」と改名されて更生してあります。

東亜の英の二大拠点の一、香港の総攻撃が開始されました。

そして今年は英の香港領有以来百年目で難攻不落を誇った要■も我が無敵陸軍の前は一たまりもなく滅んでしまいました。

それから新嘉坡、ハワイの大爆撃行で就づくハワイの爆撃は戦前何人が予期したでありませう。そしてあの怒涛咆哮する太平洋を我が無敵海軍の■が活躍してゐると思ふと実に頼もしい次第で、あの成果を知ったときは我々一億の実感はいかばかり察して尚余りあります。

上陸作戦としてはマレーコタバルの敵前上陸であり、それが五五日して神速果敢マレー半島を席卷して全世界を驚愕せしめ英、米を恐怖のどん底に落とし入れたのであります。

その他数々の捷報を聞くごとに万霊の拍手を以って皇軍の戦果を讃へて戦争であの感激程嬉しさを身にひしひと感じた事は僕には今までで初めてであります。

校長先生の訓話にも「来たるべき秋が来ただけ、そして銃後にゐる我々は各自の持場に精励する事が最もよい皇軍将兵に答える法です」と力説されました。

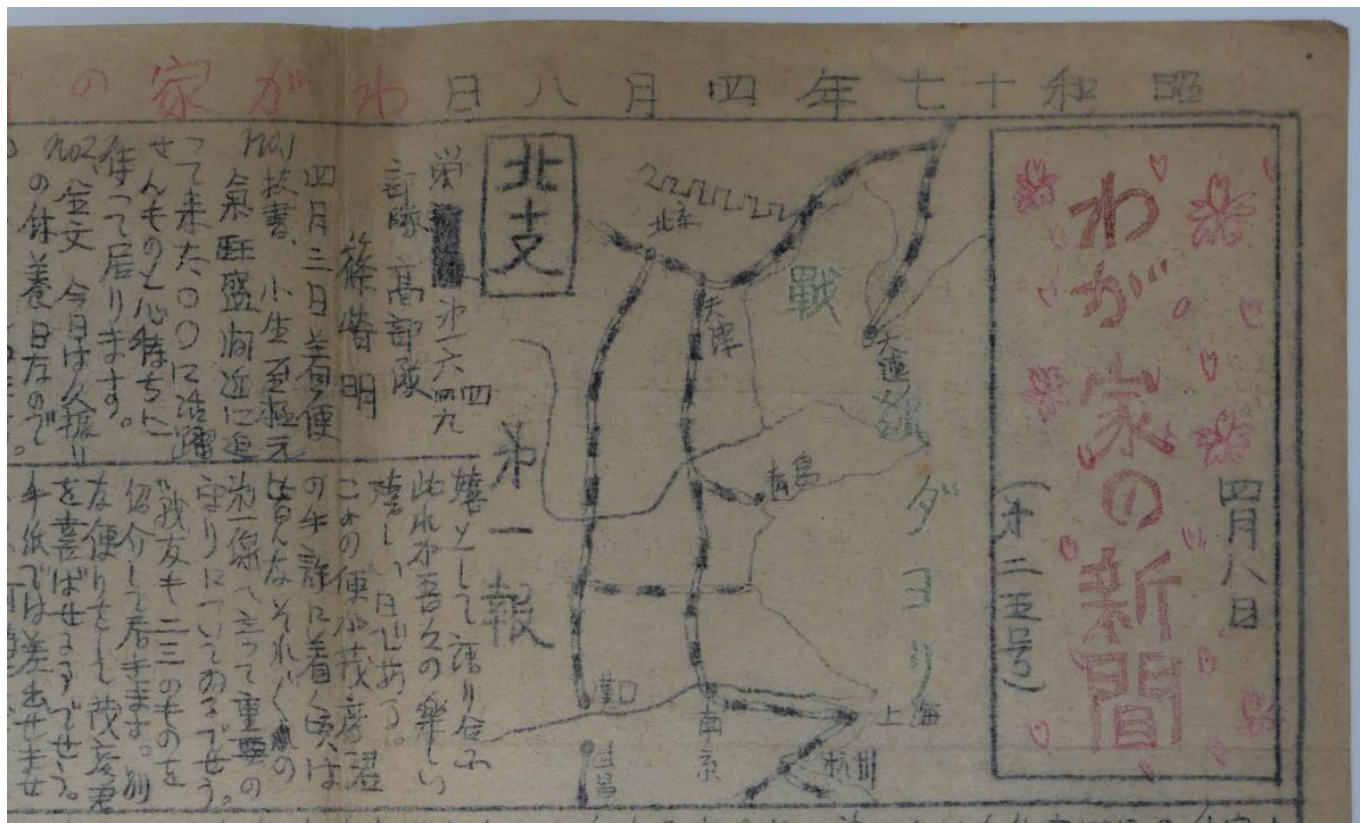
放課後は戦勝祈願及び皇軍の武運を祈るために全校生徒平野神社に参詣したのであります。

ラヂオ屋では終日スキッチを入れ、道行く人は誰も暫し歩を止め戦況ニュースに耳を傾けてみました。

各家庭では、日頃の練磨を示すのは今日だと防空用具を並べて、備あればやがて夜となって大敵である以上出来ず防空下令が発令されて警戒管制に入ったのであります。(茂彦)

(以上『わが家の新聞』24号)

■は判読不能文字



出征兵士の投書が掲載された 25 号

関係書籍					
請求記号	書名	著者名	出版者	出版年	所在
909.9-カ	少年倶楽部時代：編集長の回想	加藤謙一	講談社	1968	書庫1
051.02-18	『少年倶楽部』と読者たち	岩橋郁郎	ゾーオン社	1988.1	書庫1
051.8-クロコ	『少年倶楽部・少年クラブ』総目次 中巻（書誌書目シリーズ:84）	黒古一夫監修	ゆまに書房	2008.8	書庫1
778.21-オオツ	動員のメディアミックス：「創作する大衆」の戦時下・戦後	大塚英志編	思文閣出版	2017.9	一般資料
726.101-オオツ	大政翼賛会のメディアミックス：「翼賛一家」と参加するファシズム	大塚英志著	平凡社	2018.12	一般資料
726.101-オオツ	大東亜共栄圏のクールジャパン：「協働」する文化工作（集英社新書:1107D）	大塚英志著	集英社	2022.3	一般資料
374.1-2	新教育に於ける學級經營（新教育叢書:第1篇）	野村芳兵衛	聚芳閣	1926.5	書庫1
375.2-4	生活学校の諸活動	滑川道夫, 稲垣友美共著	牧書店	1949	書庫1
816-113	家のくらしと生活綴方	奈良作文の会編	百合出版	1976	書庫1
370.8-31-6	生活綴方とともに1, 2（国分一太郎文集:5-6）	国分一太郎著	新評論	1983-1984	書庫1
371.56-3	小学教師たちの有罪：回想・生活綴方事件	国分一太郎	みすず書房	1984.9	書庫1
289.1-1086	国分一太郎：転向と抵抗のはざま	津田道夫	三一書房	1986.10	書庫1
375.86-ネモト	子ども文化にみる綴方と作文：昭和をふりかえるもうひとつの歴史	根本正義著	KTC中央出版	2004.5	書庫1
※野村芳兵衛『私の歩んだ教育の道』は国立国会図書館デジタルコレクションを使用					